

教養学科地域文化研究分科

ラテンアメリカ研究コース

2021 年度春
進学ガイダンス資料

2021 年5月 11 日（火）、17 日（月）、20 日（木）
12:20-13:00　オンライン開催

■ ラテンアメリカ研究コースの紹介

「ラテンアメリカ」という地域は、一般的にスペイン語・ポルトガル語を公用語とする国々を中心としたメキシコ以南の米州・カリブ諸国を指します。植民地支配を通じてスペイン・ポルトガルの影響を受けてきましたが、先住民社会もまた今に至るまで その大きな存在感を保ち続けており、そこにヨーロッパ、アフリカ、アジア（日本、中国、南アジア、中東）からの移民が加わることによって、複雑で強烈な個性を持った民族の交差点となっています。近年のグローバル化や移民等による流動性の増大はこの傾向にさらに拍車をかけており、ラテンアメリカは、アメリカ合衆国、日本、欧州など様々な先進諸国の間でも、大きなプレゼンスを持っている地域です。

ラテンアメリカ研究コースは、この多様なラテンアメリカ地域、およびスペインの研究を対象にしています。もともと東京大学の教養学部・後期課程教養学科第二の中の一分科として1980 年代初頭に創立された「中南米の文化と社会」を起源としており、以来カリキュラム再編で何度か正式名称が変わりましたが、一貫して「中南米科」という通称で呼ばれています。現在は教養学部教養学科地域文化研究分科内の一コースとして設置されており、また大学院レベルでは、総合文化研究科の地域文化研究専攻と関連しています。

言語・文学・政治・経済・社会・歴史・文化人類学といった幅広い専門領域にわたるスタッフを擁しており、ラテンアメリカの多面的で入り組んだ現実を理解するための土台を提供します。学生たちは、高水準かつ実践的なスペイン語、ポルトガル語、英語の授業だけではなく、このようなラテンアメリカを把握するうえで不可欠な、政治・経済・文化・社会・地理などの全般的な知識を提供する講義と、この地域固有の問題を掘り下げるための演習を通じて、ラテンアメリカ地域について考えていくために必要な知識を身につけることができます。また本学の交換協定プログラムやその他の留学制度を通じて、海外で学ぶ機会も多数用意されています。

中南米科のホームページ（http://latinamerica.c.u-tokyo.ac.jp/）もご覧ください。



■ スタッフ

網野 徹哉（アンデス社会史）

専門に研究しているのはラテンアメリカの歴史、とくにアンデスの先スペイン期（インカ）から植民地時代までの歴史。現在は異端審問の活動をおいながら、十六世紀から十八世紀にかけてのアンデスにおける思想史の流れを明らかにしようとしている。また最近はアンデス世界に生きた女性の歴史も注視しており、学部の演習においてこの方面の論文を取り上げている。大学院の授業は主に古文書学の演習である。私の仕事として紹介できるのは、2008 年刊行した『インカとスペイン：帝国の交錯』（興亡の世界史シリーズ、講談社 2008 年）である。また高橋均先生とご一緒に書いた『ラテンアメリカ文明の興亡』（中央公論新社 1997 年）や、また駒場の歴史学部会の先生方と書いた『歴史の文法』（東京大学出版会）『史料学入門』（岩波書店）などに収められた論文なども読んでいただければ幸いである。

石橋 純（ラテンアメリカ文化研究）

12 年間民間企業に勤め、家電製品のマーケティングに従事しました（うち 8 年はベネズエラに駐在）。ビジネスの傍ら音楽・文化評論に携わり、10 年あまり「2 足のわらじ」を履く生活でした。学術研究の方法を修練するため大学院に進学し、97 年に会社をやめ、2000 年から大学教員に転職しました。これまでスペイン語圏を中心に 29 ヵ国の国境を越えてきました。ですが、私にとってもっともけわしい「越境」は、産／学のボーダー越えでした。現在の研究テーマは、ベネズエラとコロンビアのアフロ系民族運動の比較研究ならびに「混血社会」といわれるラテンアメリカにおける人種主義の研究です。将来の課題としては、1960 年代以降の対抗文化運動の文脈のなかで、「民衆文化」がどのように想像／創造／実践されてきたかということを、南・北アメリカ大陸、日本、西欧など異なる地域間で比較研究したいと構想しています。

受田 宏之（ラテンアメリカ経済・インフォーマル、イリーガルなものの比較分析）

大学院では経済学を勉強したので、ディシプリンを聞かれたら開発経済学やラテンアメリカ経済論と答えるようにしているものの、地域研究者として、経済学が不得意な領域、語り得ないことを明らかにするという「生産的な棲み分け」を目標としています。主たるフィールドはメキシコです。ライフワークである都市に住む先住民移住者の継続的な調査のほか、環境保全型農業とコミュニティ開発、組織暴力に対する規範の変化といったテーマにも取り組んでいます。

上 英明（国際関係史（南北アメリカ））

専門は国際関係史で、主に南北アメリカ関係を扱っています。とくに米・キューバを軸とする冷戦期の国際関係、および中南米移民の流入による合衆国の変化を研究しています。将来的には中南米研究と北米研究の架け橋となることを目指しています。

川崎 義史（スペイン語史・計量言語学）

専門はスペイン語史，計量言語学。中近世スペイン語の文献資料を計量的に分析して，人間の目では見つけにくい各時代・地方・作者の特徴やパターンをあぶり出すことを目指している。短中期的な研究テーマは中世スペイン語訳聖書と『ドン・キホーテ』の計量的研究，長期的な研究テーマは，より一般言語学的なもので，言語変化のモデル化。

斎藤 文子（スペイン・ラテンアメリカ文学）

学生時代にラテンアメリカ文学の面白さにはまり、スペイン語を勉強しはじめましたが、途中から、17 世紀初めにスペインで出版された『ドン・キホーテ』の魅力にとりつかれました。このところは『ドン・キホーテ』の著者セルバンテスのもうひとつの傑作『模範小説集』の研究に取り組んでいます。

竹村 文彦（スペイン・ラテンアメリカ文学）

とくにスペイン黄金世紀（16～17 世紀）の文学に関心があります。諷刺散文から政治論、宗教書まであらゆるジャンルに作品を残したケベード、晦渋華麗な美の世界を構築したゴンゴラ、新大陸初のフェミニストともいえるメキシコの修道女ソル・フアナ・イネス・デ・ラ・クルスらの詩作品を中心に研究を進めています。作者不詳の『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』（1554）を嚆矢とするピカレスク小説の系譜も追跡しています。また近年は、スペインとラテンアメリカの近現代詩にも視野を広げています。翻訳は、パス『泥の子供たち』（水声社）、ケベード「ペてん師ドン・パブロスの生涯」（『ピカレスク小説名作選』国書刊行会）、ボルヘス『ボルヘスの

「神曲」講義』（国書刊行会）などを手がけました。

宮地 隆廣（比較政治学、ラテンアメリカの政治と開発）

ラテンアメリカを対象とする比較政治を専門としています。 これまでの主な研究関心はいわゆる「周縁化された人々」 の政治参加です。具体的には、ボリビアとエクアドルの労働組織や先住民組織、そして貧困とされる農村コミュニティを対象に、自らの要求をどのように形成してきたのかについて研究してきました。最近では、政治参加を国家建設や民主主義の質といった政府の領域につなげて考察する研究に携わっています。また、国内外で日本のラテンアメリカ研究について紹介する仕事を近年多く引き受けたことから、改めてその歴史的展開を見直す作業にも取り組んでいます。

和田 毅 （社会運動論・政治社会学・ソーシャルワーク）

アメリカ・メキシコに計 15 年間滞在し、民主化、開発、社会運動、ソーシャルワーク、社会学方法論などを学びました。新聞記事などから政治的活動の情報を抽出して、それをデータベースに集積して分析する手法を用いて、メキシコの民衆抗議行動のパターンがどのように変化しているのかを研究しています。PH.D 取得後、ハーバード大学のポスドク研究員として、ロイター通信などのメディアから自動的にデータベースを構築するプロジェクトに従事していました。この経験を生かして、次の研究プロジェクトでは、ラテンアメリカ各国のメディアが配信するニュースからイベント・データベースをつくり、各国の政治・社会活動の比較を行いたいと考えています。このため、社会学、政治学、言語情報科学、地域研究、統計学、コンピュータ工学など分野の専門家や学生からなる学際的な研究チームを作りたいと思っています。

■ 教養教育高度化機構（KOMEX）所属のスペイン語教員

カルロス・イサベル Carlos Isabel（フィリピンの教育史）

教員としては、これまで主に日本の大学で外国語としてのスペイン語教育に携わってきました。研究面では、スペイン帝国、とりわけフィリピンと赤道ギニアにおける公教育の歴史を専門としています。将来的には、マリアナ諸島やモロッコのスペイン保護領も研究に含めたいと思っています。また、19 世紀フィリピンのジャーナリズムについても研究を進めています。

松田 葉月 Hazuki Matsuda（持続可能な開発・資源の管理と環境保全・国際協力）

研究分野では、ラテンアメリカ諸国での資源管理及び環境保全の取り組みについて研究をしてきました。特に、政治学者エリノア・オストロムが提唱する制度と共有資源管理の方法論を用いて調査を進めてきました。最近では、国際協力の分野にも研究を拡大し、日本の ODA の枠組みの中で、ラテンアメリカへの援助政策の研究にも取り組んでいます。主に、アルゼンチン、チリ、エル・サルバドルを対象に研究をおこなっています。教育については、スペイン語教育に加え、日本の ODA、グローバル・ガバナンス関連科目などの講義を担当してきました。また、共有資源の管理と利用、中米における平和構築と人間の安全保障、日本の ODA 政策などに関する論文を執筆しました。

■ グローバルコミュニケーション研究センター（CGCS）所属のスペイン語教員

グレゴリー・サンブラノ Gregory Zambrano（ラテンアメリカ文学）

私はこれまでラテンアメリカ文学の分野で教育・研究に携わってきました。主要な関心は、文学の歴史との関係、文学理論・文学批評の歴史、そして、19 世紀のラテンアメリカ近代化から最新の小説・随筆・詩における潮流にいたるまでの、文学上の出来事の受容のされ方にあります。

■ 非常勤講師（2021 年度のラテンアメリカ研究コースの授業を担当）

大串 和雄（ラテンアメリカ政治）
木下 亮（スペイン美術）
黒田 祐我（中世イベリア半島の歴史）
近田 亮平（ブラジルの政治経済）
下山静香（スペイン・ラテンアメリカ音楽論）
久松 佳彰（ラテンアメリカ経済）
松岡 秀明（ブラジルの人類学）
丸山 浩明（ラテンアメリカの地理）
牧野真也（ポルトガル語）

■ 近年の卒業論文（2015 年度以降）

2020 年度
- メキシコのナショナリズムにおける中心：グアダルーペの聖母とファン・ディエゴ
- 犯罪者処遇の改善と社会復帰：ドミニカ共和国における刑務所改革とその評価

2019 年度
- ボルヘス『不死の人』に見る不死の世界観
- メキシコ麻薬戦争と宗教：教会、ナルコ宗教、及び元ナルコの改宗から見る宗教の役割
- マヌエル・デ・ペドローロの描く「空間」と「境界」―Crèdits humans を例に―

2017 年度

- 環境保全と資源開発　―エクアドル・ヤスニ ITT イニシアティブ失敗の原因―

2016 年度
- 『野生の探偵たち』にみるスタンダードの創造的破壊の試み　―西洋的探偵小説及びメキシコ詩主流派への挑戦―
- アスレティック・ビルバオのバスク人主義とバスク社会の多様化　―イニャキ・ウィリアムズの登場を通して―
- ブラジルの沖縄県系人のアイデンティティ　―ウチナーンチュの民族系ネットワークとエイサー―
- ナルコ・コリードに見る「英雄」像　―ホアキン・グスマンの事例―
- チリ・マプーチェの権利・土地問題の歴史的変遷と近年見られる文化発信について

2015 年度
- ムンド・マヤ計画下の観光政策に帯する先住民コミュニティの反応
- ナショナリズムと音楽文化実践の関係～フランコ独裁下スペインにおける映画 LOS TARANTOS を題材に～

■ ここ 10 年ほどの卒業生の進路

大学院進学（総合文化研究科、人文社会系研究科、経済学研究科）、三井住友銀行、三菱 UFJ 銀行、商工中金、共同通信社、日経新聞社、丸紅、トヨタ自動車、ブリヂストン、旭硝子、マルハニチロ、JFE スチール、鉄鋼連盟、鹿島建設、三菱電機、東京書籍、楽天、アクセンチュア、電通イーマーケティングワン、クニエ、ビービット、JICA、JETRO、都道府県庁　など

■ 中南米科研究室（８号館４０９号室）

主に中南米科の後期課程学生や大学院生が集まる部屋です。少し窮屈な部屋ですが、各種辞書・辞典やラテンアメリカ関連書籍、映画 DVD などが揃っており、貸し出しも可能です。また、中南米科学生用のパソコン２台とプリンター、スキャナー、電子レンジやケトルなども自由に利用できます。

通常でしたら下記のスケジュールで、教務補佐（相田）が勤務していますので、質問などあれば気軽にお立ち寄りください。（キャンパス立ち入り制限の関係で、研究室の開室や勤務が変則的になっておりますので、まずメールにてご連絡いただけますと幸いです。）

火　12:00-16:00
木　12:00-17:00

また、メールでのお問い合わせは aida-yutaka@g.ecc.u-tokyo.ac.jp（ラテンアメリカ研究コース教務補佐：相田）までお願いします。

